

八幡浜市川之内地区民俗調査報告

民俗研究科

調査概要

ここ三〇年間、社会生活の急激な変化にともない、生活文化の貴重な遺産である有形、無形の民俗資料は散失し、消滅しつつある。現在は、生活環境の変化は当然のものと認識する世代も多くなり、一九六〇年代以前の民俗は伝承の母体さえ失いつつある。本報告では伝承母体を失いつつある地区として八幡浜市川之内地区を取り上げる。今年度当館では、同地区のN家から、民俗資料の寄贈、寄託を受けており、これらをもとに、聞き取り調査の結果を加え、一九六〇年代以前の民俗を紹介する。

八幡浜市川之内地区は、市の東端に位置し、東を大洲市、南を宇和町に接する山間地である【写真①】。戸数は一二四戸、人口は三二〇人（昭和六〇年）である。千丈川の最上流にあつて標高七五〇四〇メートルの間在し、大部分は傾斜角一五度以上の傾斜地で、南予地方特有の段々畑の様相を示している。地区の中央を国道一九七号線が通り、集落は国道沿いに川之内下ノ組、その北側に上ノ組、南側に田浪、古藪の各地区からなる。昭和四六年に大洲市へ抜ける夜昼トンネル（全長二一九四メートル）が開通するまでは、川之内上ノ組を通つて夜昼峠を越える県道が主要街道であつた。また、その旧道が開通した明治四三年以前は、川之内下ノ組の川之内小学校脇から上ノ組に登る道が主要街道（大洲街道）であつた。

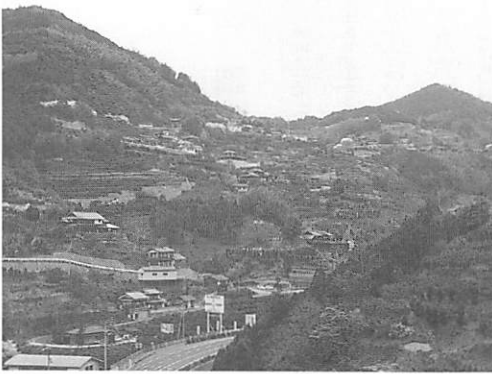
氏神は大元神社。寺は地区内に存在せず、住民は市内広瀬にある万松寺の檀徒となっている。近世においては川之内（河内）村を構成

し、その後、西宇和郡千丈村大字川之内を経て、昭和三三年、八幡浜市に編入されている。

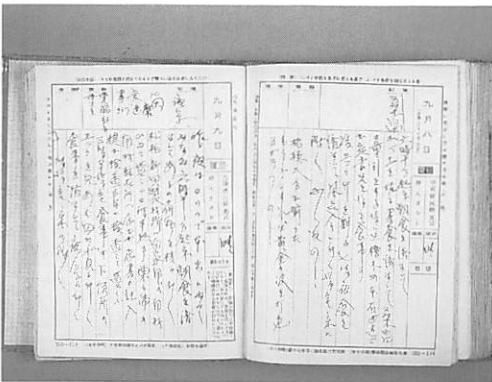
同地区は八幡浜と大洲を結ぶ峠に位置しているが、昭和一四年の鉄道の開通、高度経済成長期の国道トンネルの開通などにより生活環境が激変している。現在の住民は八幡浜市内、大洲市、保内町などに通勤する者が多く、平日の昼間は閑散としている過疎の地区である。人口も年々減少し、地元川之内小学校の平成八年度の新入生はゼロという状況である。このように交通事情の変化などにより過疎化、高齢化が進んでおり、地域の民俗が大きく変貌、消滅している。

今年度、N家から当館に寄贈、寄託になった資料は、生活環境が激変する以前に使用されたもので、昭和二〇年代まで使用された農具を中心とする民具と、農作業や信仰、年中行事などが記録されている昭和一五年の日記である【写真②】。これらの資料をもとに、川之内地区で聞き取りを中心とする現地調査を行ない、昭和二〇年代前後の民俗に関する情報を収集した。今回は当時の民俗を記録し報告するものである。

本報告では、この地区で特筆される三つの事例を中心に紹介する。第一に、川之内の稲作を取り上げる。現在、同地区の産業は柑橘栽培が中心であるが、昭和二五年頃までは稲作が行われ、急傾斜という立地環境のもとで多くの階段状の田（棚田）が営まれていた。棚田での生業は愛媛県南予地方の特徴的な生業形態である。今日、棚田は全国的に見ても年々減少傾向にある。その理由は平地での稲作



写真① 川之内地区の全景



写真② N家の日記（昭和15年）



地図1 八幡浜市川之内地区
(国土地理院5万分の1地形図より)

以上に傾斜地でのそれは労苦が多く、農業の担い手の高齢化や後継者不足、国の減反政策などによるためである。当館が寄贈を受けたN家民具の内、農具類は棚田で用いられたものである。ここでは昭和一五〜二五年頃までの川之内地区の生産・生業として、棚田における稲作を紹介する。

第二には、地区の信仰、芸能伝承の概要について紹介した上で、特にこの地区に伝承されている、石鎚山のお山開きの時期に氏神大元神社で奉納されている「お山踊り」を取り上げる。お山踊りは県下の喜多郡、東宇和、西宇和地帯に集中して伝承されており、それも石鎚山を勧請している地域に多い。例えば、大洲市高山、東宇和郡城川町竜泉、西宇和郡瀬戸町塩成、八幡浜市中津川、同市向灘などに分布し、東予、中予や南宇和方面では行われていない。ここでは川之内のお山踊りの内容を中心に紹介する。

第三には、地区内の四国遍路道とその習俗を取り上げる。この川之内地区内に一基の遍路道標が現存している。同地区はもとより八幡浜市内には四国遍路の札所はなく、地理的にも札所と札所を結ぶ位置にもないため、従来この地域の遍路道は注目されず、調査も行われてこなかった。今回の調査の結果、かつて川之内を通り、道沿いの家で接待を受けたり、善根宿を頼みにきた遍路がいたことに注目し、ここでは、川之内地区内の遍路道と、聞き取りによって得られた遍路習俗について紹介する。

一、川之内の稲作―N家の事例―

(1) 川之内の生産・生業

現在、八幡浜市川之内地区の農業生産は柑橘栽培が中心である。主要作物は、温州蜜柑、伊予柑、甘夏柑などで、地区のほとんどは

傾斜地の果樹園である。「世界農林業センサス」(一九八〇)によると、経営耕地二九二三アールの割合は、樹園地(八二%)、畑(九%)、田(九%)で、経営耕地面積増減率(一九七〇〜八〇)は、総じて減少傾向にあり、とりわけ田の減少(六七%減)は顕著であることがわかる。

江戸時代、同地区は川之内村(河内村とも書く)と称し、宇和島藩領に属した。石高の推移をみると、天正検地では二六七石余、寛文検地では三二〇石余、「元禄村浦記」「天保郷帳」ではともに四五二石余であり、概して、石高の増加が著しいことがわかる。これは、宇和島藩の新田畑開発(元禄九年の一〇万石高直し)によるものと見られ、平野部のみならず、宇和海沿岸や山沿いの急斜面にまで開発が及び、階段状の田(棚田)や段々畑を新たに開墾したことを物語っている。今では果樹園に姿を変えた傾斜地も昭和三〇年頃までは、棚田において稲作が営まれ、川之内地区の生産・生業の基幹をなしていた。現在、南予地方に残る棚田は、こうした歴史的経過とともに、先人より受け継がれてきたものといえる。

(2) N家の事例

N家は同地区の丘陵上に位置する。かつて家族全員で稲作などの農作業を行いながら暮らしていたN家は約二〇年前より無住となり、現在、家族は市内の新居に暮らしている。N家より南方を臨めば、眼下には段々状の蜜柑畑が連なり、麓には国道一九七号線が走る。N家から東南側にかけての急傾斜地の約八反がN家所有の農地である。昭和二八年に蜜柑栽培を始めて以来、農地の大半は蜜柑畑になっているが、それ以前はこの急傾斜地で稲作が営まれていた【写真③】。N家は基本的に自作農であったが、積極的にさまざまな生産・生業を試み、昭和一五〜二〇年頃には稲作の他、畑作、養蚕、炭焼き、畜産(牛)、荷馬車の経営、昭和二五年頃にはさらに不動産の経営な

ども行う兼業農家であった。畑作では麦、大豆、薩摩芋、大根、桑、枇杷などをつくっていた。炭焼きは冬場の生業として行われ、木炭は大阪方面に出荷していた。蚕は春・夏・秋の年三回ほど飼育し繭からとれた生糸も出荷していた。

N家には昭和一五年の日記(以下、「N家日記」)がある。N家の戸主の息子(当時二二歳)のもので、主な内容は勤務していた郵便局を止め徴兵に招集されるまでの間、彼が初めて農作業を経験した時の記録である。「N家日記」には、

一生懸命にやった。生まれて初めての仕事で毎日日本当に骨折りだ(二月二二日条)。

とあり、慣れない仕事を一生懸命に頑張り、N家の多様な生産活動への一助となっていた様子がうかがえる。

△表1▽は今回、寄贈を受けた資料の一覧表である。ここに見る生活道具類は現在には使用されていないが、その一つ一つがかつてN家のくらしを支え、N家の生産・生業の歴史を物語っている。

田は先祖代々受け継いできたが、昭和一八年の大水害によって、一時、棚田(N家では「ダンダンバタケ」と呼ぶ)は流失したが、地区の人々と協力しあい、水害による残骸を用いて石垣(N家では「ギシカケ」と呼ぶ)を改修した。その際、以前より石垣を高くし作付面積の増加を図り、その結果、水害後の棚田は約二〇段築かれ、一つの田の作付面積は大きいもので約三畝(三〇歩)、小さいもので畳約二枚程度であった。

長年続けてきた棚田での稲作をやめ蜜柑栽培に転換した理由は、①水源の乏しい地帯のため水利条件が良くない。②蜜柑栽培の方が収入が多く生計が安定するなどである。これはひとりN家のみでなく、当時の川之内地区の他農家でも同様である。現在、同地区において棚田で稲作を行っているのはわずか数軒である。

蜜柑栽培に転換後、蜜柑は植樹から約五年は実がならないため、その間、世帯主はトラックの運転手などの仕事をして生計を支えていた。

(3) 生産暦

△表2▽はN家における昭和一五〜二五年頃までの生産・生業について、聞き取り調査及び「N家日記」の記述をもとに一年間の生産暦をまとめたものである。

ここでは、棚田における稲作について、生産暦に示した農耕過程の順に紹介する。

苗代(こしらえ)

苗代は田植えをするまでの稲苗を育成するところである。N家の苗代は上段の棚田に位置し、旧大洲街道沿いに面する。五月上旬、苗代作りが始まる。その手順は、①水溜め、②苗代田の荒起こし、③区画作り、である。②と③の作業はおよそ一日で済ましていたが、①については山間部のため水源に乏しく、水溜めにはかなり苦労した。このことはN家の農作業全般にいえることであり、とりわけ棚田における稲作にとって水の確保の問題はきわめて重大であった。実際、N家では雨水の積極的活用と棚田付近を細々と流れるズボガワ(主頭川)の山水に依存していた。水の利用に際しては水利組織は特になく、また、水をめぐっての争いなどはなかったが、何よりも水で苦労した。戦前は雨乞いのため大元神社で雨乞い踊りが奉納される年もあった。

苗代に水を溜める際には、雨水の使用は無論、主頭川の孟宗竹で作った樋を数本かけ、水を入れた。そして、鋤で耕した後、短冊状に七〜八区画(一区画は畳約一・五枚)作り、苗代田は完成する。

糶撒き・育苗

苗代田への種撒きは五月中旬までに行われる。昨年より保管していた種糶を水に浸けて発芽させる。良質な種糶を選別した後、麻袋に詰め、アオイを入れた風呂の残り湯に一晚中浸けて消毒する。消毒の終わった種糶は、一旦、水を排出した苗代田の両側の畦より等間隔に撒き、モミオシコテと呼ばれる板で田面を押さえ、種糶を土に隠れる程度に固着させる。糶撒きの仕事は熟練を要するので戸主の仕事であった。ただ、短冊状の苗代といえども、屈曲のある棚田においては、均等に撒くには一層の熟練が求められた。苗代に種糶を撒く日、苗代田の水口近くの畦に手頃な石を立て、ツゲの花の枝を挿し、「苗代の苗がよく育ちますように」と願った。これはオサンバイオロシと呼ばれる豊作を祈る農耕儀礼である。糶撒きが終わると翌日に水を入れる。一般に苗代で苗を育てる期間は四〇日前後とされるが、苗作りを失敗すれば稲はできず、苗代での育苗は細心の注意や工夫が必要とされた。主頭川からひいた山水は水温が低いので、苗がイモチ病にかかるのを防ぐため、水を苗代田に入れる際には苗代の外縁を一回まわして、水を温めてから入れた。

田起こし

六月上旬より本田の造成作業に取りかかる。二毛作による麦刈りを済ませると、ただちに苗代の畦を切り、下の田に水を落とす。ふしをとった孟宗竹は畦の切り口にあり、上の田から下の田へと水を導く。下の田では堰を作り水を溜める。水が溜れば同様にしてさらに下の田へ水を落とす。こうした作業を繰り返す。数日かかってやっと本田に水が溜ると、スキ(犁)【写真④】を牛に曳かせて田起こしを行い、次にカナコ(馬鋤)【写真⑤】を曳かせて土の塊を砕きやわらかくする。山の田は土が硬いため、耕起作業は町の田より一回分多かつた。また、小さな棚田では牛は使えず手作業となる。現在では

動力耕うん機を使用するが、昭和三〇年頃までは畜力を利用していった。N家にとって牛は大切な労働力であった。

いずれにせよ、急傾斜で段々状の棚田において一段一段、農具を運び、牛を操り、田を耕してゆくのは平野部の田より大変であった。「N家日記」は記す、

一日中田すきだ。田園の仕事は本当に手足が疲れる(六月一七日条)。

畦かけ

田起こしが済むと、畦かけ(畦作り)作業が行われる。畦は田の境を示すとともに、水を張ったときの堤として重要な機能をもつ。畦かけは田の水が漏れないために、ひと鍬ずつ田の泥をかけ足で踏み固める作業である。N家ではこの作業を効率的に行うために、アゼオシ(畦押し)【写真⑥】を自家で製作した。足で踏み固める代わりに、棒先が畦型になっているこの道具を使用した。それでもこの作業に二〜三日費した。農具は既成品のみ使用するのではない。農作業に従事する人々がそれぞれ使いやすいように考察した。できあがった畦には、大豆の種を植えた。

代かき

田起こし、畦かけが済むと代かきである。代かきは田の土を粉砕してよく混ぜる作業で、これを繰り返すことにより田の水漏れを防ぎ、苗の根付きと発育をよくする。再度、犁と馬鍬を牛に曳かせて、下の田から上の田へと順に行う。牛を思うように動かすには熟練が求められる、主に戸主が当たった。最低二名は必要で、一人は牛の進行を操り、一人は農具を操作した。

施肥

代かきが一段落すると、昨年より保管していた刈り草(刈敷)を有機肥料として田一面に平均して撒き、約一週間寝かし腐らせる。そ

うすると田の水面が赤く銀色に輝くという。化学肥料のような速効性はないが、稲を作る地力を保つためである。

田植え

枇杷の採り入れが無事済むと、六月の下旬から七月初旬にかけて田植えが始まる。この時期は梅雨期である。水が乏しい棚田にとっては恵まれた期間である。田植えの前日もしくは当日の朝早くから、苗代では本田に植えるための苗取りが行われる。一株ずつ取り、根の泥を洗い落とし、束ねて藁でくるくる。この時、取り方が悪ければ根元を傷め、植付けができにくく収穫にも影響する。苗取りが終わると、実際に田植えを行う田にエブリ(柄振り)を使って田に凹凸がなく、実際に最後の代かき(植代)を手作業で行う。こうして準備が整うと下の田から上の田へ順に植付けをする。当時、動力田植え機はななく一株ずつ手で植えていた。方形の田ではなく棚田であるために、田植え定規や型付け等の道具は使用できず、いわゆる正条植えはできない。したがって、わん曲した畦にそって上手く稲株の間隔を測りながらムラなく植えなければならなかった。家族のみで約二〇段ほどある田を植え付けるのは到底無理なため、親戚や近所の人と共同で作業を行い、約二日間費した。N家もまた同様に他家の田植えを手伝った。

「N家日記」には次のように記されている。

田植に行く。一生懸命に植える。梅雨に入り今日が一番雨が多かつた。

毎日田仕事ばかりなので、足がたまらなく痛む(六月三〇日条)。そして、本田の田植えが済むと、最後に苗代田に犁、馬鍬を入れて田植えを行った。また、田植え後、約一週間以内に田を点検し、不良苗があった場合は取り替えていた。村全体が田植えを終えると一日間、野休みになり村民は御馳走を持ち合い、疲れを癒した。

草取り

田植え後の七月中旬から八月にかけては一年で最も暑い時期である。田の雑草は土や水の養分を摂取し、稲の成長を妨げるため、稲刈りまでの間に何回か除草作業が必要である。棚田の中でも比較的面積が広い田は、クサトリ(回転式除草機)【写真⑦】を使用した。田の畦間を手で押しながら前進させ、後方の二連の歯車を回転させ、田の土をかき混ぜて雑草を取り、それを土の中に混ぜ込むもので、効率的に草取りができた。しかし、小さくわん曲した田、畦や石垣などの除草は、素手で行うため、指の爪がよく欠け、大変な作業だった。また、アヒルの子を田に入れて雑草を食べさせたこともあった。刈り草は肥料として田に入れた。

害虫駆除

稲につく害虫の代表としてウンカがある。駆除方法としては一般的な注油法をとっていた。「ウンカ殺しの油入れ」と呼んでいる竹筒を作り、中に石油を入れておき、広がる範囲を考えながら、必要最小限の油を田に落とす。そして、笹で稲穂をゆっくり撫で、ウンカを水面に落して駆除する。なお、虫送り行事はなかった。

稲刈り

「N家日記」に記す。

稲穂大分出揃った。もう少しすれば黄金の波を打ちよせるだろう(九月八日条)。

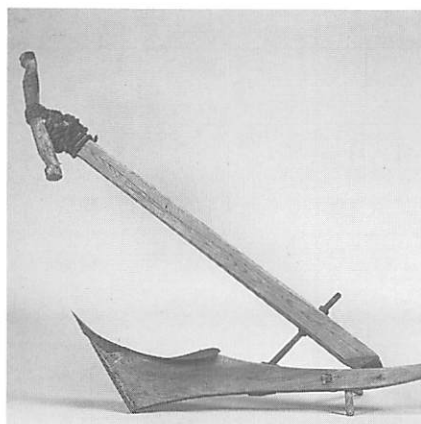
一〇月下旬、秋祭りが済んだ頃、ついに収穫の時を迎える。実って頭をたれた稲穂を稲刈鎌(鋸鎌)を使い刈り取っていく。四〜五人で全部刈るのに約二日要した。同時に、刈った稲穂を乾燥させるための稲木作りが行われる。稲木は最も広い棚田に、毎年保管している木材を運び、石垣を背に組み立てる。刈った翌日には稲穂は架けられ、約二〇日間天日に干す。良質な米を作るためである。なお、

収穫儀礼は亥の子の他には特になかった。

脱穀・調整

稲穂は天日で充分乾燥させた後、脱穀にかけられる。脱穀とは穂から穀粒を取り離す作業である。稲木を設置した棚田にダッコキ(足踏式脱穀機)【写真⑧】を運び、足で踏板を踏み歯の付いた円形の抜胸を回転させ、その上に稲穂をあてて脱穀する。また、籾と藁屑などの選別には、トウミ(唐箕)【写真⑨】を用い、風洞の中の羽根を手回しハンドルにより回転させ風力を利用して行った。これらの作業を一通り終えると、籾をニワに敷かれた藁の上で一日乾燥させ、大きなカンに入れて納屋に保管する。一二月の中旬、農協が籾摺り機を持って農家を巡回する時に玄米にしてもらう。近年までは各農家で籾摺り臼を用い、「籾摺りうた」を歌いながら夜遅くまで籾摺り作業を行っていた。籾摺りした玄米は、最後に、精米機によって精白する。こうしてできた米は、収穫高の約三〇％は供出米として農協を通じて国に納め、自家米は平年、二〜三俵であった。N家において白米の御飯を食べるのは、正月、春祭り、お盆、おこしん(庚申講)、亥の子などの特別な日で、ふだんは、丸麦と白米の割合が半分ずつのハンバク(半白)の御飯であった。

(今村 賢司)



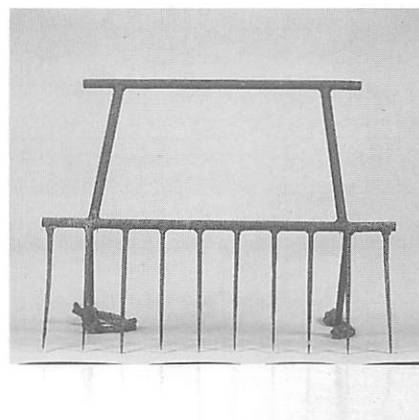
写真④ ス キ



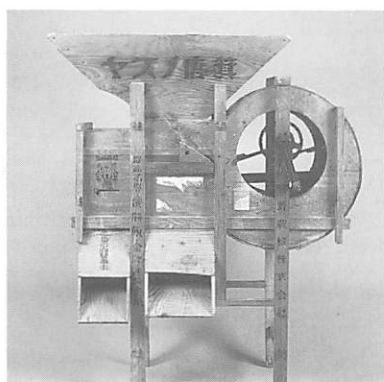
写真③ 棚田の跡地



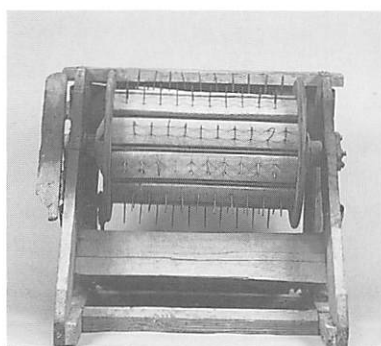
写真⑥ アゼオン



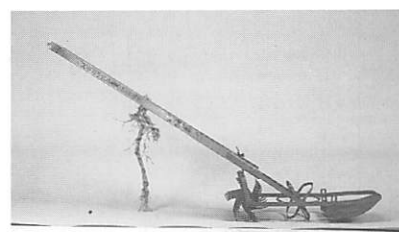
写真⑤ カナコ



写真⑨ トウミ



写真⑧ ダッコクキ



写真⑦ クサトリ

<表1>川之内地区N家寄贈民具一覧

| 名 称 | 保有量 | 分 類 | 使用開始年代 | 用 途 | 備 考 | 写真 番号 |
|-------------------|-----------|-----------------|------------------|---------------------------------------|---------------------------|----------|
| | | | 最終使用年代 | | | |
| ビツ (米櫃) | 1 | 食 貯蔵用具 | ? 昭和30年頃 | 飯米を入れる容器。 | 購入 | |
| ホオン (飯櫃) | 2 | 食 飲食器 | ? 昭和30年頃 | 冬季に飯を保存するための容器。 | 購入 | |
| ツルジョウケ (飯籠) | 1 | // | ? 昭和30年頃 | 夏季に飯を保存するための容器。 小さな竹籠。 | 自製 | |
| ニオケ (荷桶) | 1 | // | ? 昭和25年頃 | ハレの日に用いる桶。赤飯など を入れて振るまう。 | 購入 | |
| トジョケ (笊) | 3 | 食 炊事用具 | ? 昭和30年頃 | 炊事その他、梘として使用する。 梘一杯(玄米)は約一斗に相当。 | 購入 | |
| イシウス (石臼) | 1 | 食 調理・調整具 | ? 昭和25年頃 | 穀物の精白や餅搗きで使用。 | 購入 | |
| キネ (杵) | 1 | // | ? 昭和25年頃 | 穀物などを臼に入れてつくため の用具。 | 自製 | |
| イモツキ (芋つき) | 1 | // | ? 昭和25年頃 | 家畜(牛)の餌作りに使用。桶に 入れた薩摩芋を叩き細かくする。 | 自製 | |
| ショウユダ (醤油樽) | 1 | 食 醸造・製造用具 | 明治時代 昭和25年頃 | 自家で使う醤油を製造するための樽 で、小麦や大豆等を入れ発酵させる。 | 購入。樽の輪(タガ) はめは専門職人が行う。 | |
| コタツ (火爐) | 1 | 住 暖房具 | ? 昭和20年頃 | 行火や秋蚕の温度調節に使用す る。 | 購入 | |
| スキ (犁) | 1 | 農耕 耕作用具 | ? 昭和25年頃 | 深耕用農具。畜力利用の犁で、 牛にひかせて田を耕す。短床犁。 | 購入 | ④ |
| カナコ (馬鍬) | 1 | // | ? 昭和25年頃 | 土塊を細かく砕く用具で、畜力 を利用し水田の代掻き用いる。 | 購入 | ⑤ |
| ツチイレ (土入れ) | 1 | // | ? 昭和25年頃 | 畑作用農具。麦の生長を促すた めに土を入れる時に使用する。 | 購入 | |
| クサトリ (回転式除草機) | 1 | 農耕 管理用具 | ? 昭和25年頃 | 田の雑草を押込んだり浮かせたり して除草する。 | 購入 | ⑦ |
| ミゾヅクリ (溝づくり) | 1 | // | 昭和10年頃 昭和25年頃 | 畑作用農具。畝間の溝を作る時 に使用する。 | 自製 | |
| アゼオシ (畦押し) | 1 | // | ? 昭和25年頃 | 畦作りや補修の時に使用する。 | 自製 | ⑥ |
| ダッコクキ (足踏式脱穀機) | 1 | 農耕 収穫・調整用具 | 大正時代 昭和20年頃 | 扱歯を足踏で回転させ、そこに 稲穂をあてて脱粒する。 | 購入 | ⑧ |
| トウミ (唐箕) | 1 | // | 昭和20年頃 ? | 扇板を回転させ風を起こし、重い 精粒、軽い屑粒や藁屑等に選別する。 | 購入。ヤスノ唐箕。 ウチバ型。 | ⑨ |
| フルイ (篩) | 2 | // | ? 昭和25年頃 | 細かい物と粗い物とを選別する 時に使用する。 | 購入 | |
| カラサオ (唐棹) | 1 | // | ? 昭和25年頃 | 麦の脱穀用具。麦の穂先を莖に 広げたたいて脱粒する。 | 自製 | |
| イノコイシ (亥の子石) | 1 | 農耕 儀礼用具 | ? 昭和25年頃 | 旧暦10月の亥の日に行う刈り上 げの儀礼に使用する。 | 藁製の棒を使用す る場合もある。 | |
| オノ (斧) | 1 | 山樵 山樵用具 | ? 昭和25年頃 | 立ち木の伐採や木を割るのに使 用する。 | 購入 | |
| ノコギリ (鋸) | 1 | // | ? 昭和25年頃 | 竹や炭をひき切るのに使用する。 | 購入 | |
| カワムキ (皮むき) | 1 | // | ? 昭和25年頃 | 松、杉、桧などの皮をむく時に 使用する。 | 購入 | |
| シノアミ (俵編み機) | 1 | 手工 原料処理用具 | 明治時代 昭和25年頃 | 藁を用いて米俵や炭俵を作る時 に使用する。 | 自製 | |
| ツツ (木槌) | 1 | // | ? 昭和25年頃 | 藁を叩いて柔らかくし丈夫にする ための木槌。 | 自製 | |
| ハミキリ (藁切り) | 1 | // | ? 昭和25年頃 | 藁などを切断する時に用いる。 | 購入 | |
| テンピンボウ (天秤棒) | 1 | 交通・運輸・通信 運搬具 | ? 昭和25年頃 | 肩担運搬に用いる棒。 | 自製 | |
| テンピンカゴ (天秤籠) | 4 (2組) | // | ? 昭和25年頃 | 肩担運搬に用いる籠。 | 自製 | |
| ロクロ (滑車) | 1 | // | ? 昭和25年頃 | 重い物を引き上げたりする時に 使う道具。 | 購入 | |

<表2> N家の生産暦

| 月 | 稲 作 | 畑 作 | そ の 他 |
|------------------------|--|----------------------------------|-------------------|
| 1 月 上旬 中旬 下旬 | | | 炭焼き ↓ |
| 2 月 上旬 中旬 下旬 | | | |
| 3 月 上旬 中旬 下旬 | | 桑畑、麦の手入れ ↓ | 櫟木植付 ↓ 杉苗植付 |
| 4 月 上旬 中旬 下旬 | | | 杉苗、桧苗植付 |
| 5 月 上旬 中旬 下旬 | 苗代準備 苗代初撒き、育苗 | 桑摘み ↓ | 春蚕 ↓ |
| 6 月 上旬 中旬 下旬 | 本田の荒代、水溜め、施肥 畦かけ、本田の中代 本田の植代、田植え | 麦刈り、麦扱き 大豆の種撒き、芋植え 枇杷の採り入れ | |
| 7 月 上旬 中旬 下旬 | 田植え、野休み 田の草取り ↓ | 桑畑の手入れ ↓ | |
| 8 月 上旬 中旬 下旬 | 施肥、石垣・畦の草取り | 桑摘み | 夏蚕 ↓ |
| 9 月 上旬 中旬 下旬 | うんか駆除 | 大根の種撒き | 秋蚕 ↓ |
| 10 月 上旬 中旬 下旬 | 稲刈り、稲干し ↓ | 麦の種撒き | |
| 11 月 上旬 中旬 下旬 | 脱穀、保管 | 大豆取り、芋掘り | |
| 12 月 上旬 中旬 下旬 | 精白、保管 | | |

一、川之内の信仰と芸能

(1) 川之内の信仰

「N家日記」には農作業に関する記述のほか、年中行事についても多く記されている。△表3▽では「N家日記」に見える信仰に関する年中行事の記述をまとめて紹介している。ここでは、川之内地区の寺院、神社、民間信仰について紹介する。

ア 寺院

現在、川之内には寺院は存在しない。かつては、影浦にセンブクジという寺院があったといわれている。この寺は、二五〇年以上前に火事にあつて廃寺となり、爾来、川之内の住民は市内広瀬の万松寺の檀家になっている。センブクジ跡には木造の薬師如来坐像が祀られていて、毎年各組が順番に管理している。四月八日には甘茶の接待を行っている。地元ではセンブクジの本尊は薬師如来で、宗派は臨済宗妙心寺派ではなかったかと言われている。『宇和旧記』によると、「河之内村、一善福寺、本尊阿弥陀、禅宗、山号なし（中略）古跡には薬師観音有之由」とあり、これがセンブクジのことと思われる。葬儀については万松寺の住職が行っているが、盆の棚経は地元の者が読んでいる。これは、万松寺の檀家が六〇〇軒と多く、住職一人では回りきれないので、依頼されて行っている。

観音堂 南裏には観音堂があり、四月八日に茶の接待を行っている。

大窪山福楽寺 川之内の南部に位置する古藪の住民は宇和町河内にある大窪山福楽寺の檀家になっている。この寺はむかし古藪と宇和町河内との境の山頂にあつたが、戦後宇和の河内に移った。川之内地区の住民はかつては、遠足で大窪山に登った。古藪の住民は、昭和初期までは八幡浜より宇和に出る方が近かったため、大窪越えをして卯之町に買い物に行っていた。

イ 神社



写真⑩ 大元神社

宝暦一〇（一七五〇）年『宇和島領神社録』によると川之内村の神社は「大本社」、「熊野社」、「菊理姫神」が記されている。明治四四年調査の『愛媛縣社寺一覽表』には「大元神社」、「白王神社」、「石槌神社」が記されている。

大元神社 大元神社の神主は昔から地区にはいない。市内八幡神社の宮司が祭祀を司っている。地元には宮守がいるが、昭和六〇年頃まで務めていた宮守は、頻繁に石槌山に登拝していた。

千賀居森神社 夜昼峠の千賀居森神社（チガイモリ）は石鎚と金比羅を祀ると言われる。祠の中には石造の馬頭観音も祀られている。この神社は、大上地区の住民が祀っている。鳥居と手水鉢の銘に明治三二年とあり、明治三〇年代以前に勧請されることがわかる。明治四四年に大元神社に合祀されたが、昭和一〇年頃に大上に災いが起こり、分祀して現在地に帰座した。このとき鐘、太鼓を鳴らしながら戻ったという。

白王神社 古藪には白王神社が祀られている。境内社には石鎚神社があり、役行者像、不動明王像、白王様の石造品がある。これらは、川之内村の寄進によるものである。

祭り 地区の祭日は四月三、四日の春祭りである。三日には大元神

<表3> N家日記にみる年中行事 (昭和15年)

| 月日 | 曜日 | 旧暦 | 干支 | 行 事 | N 家 日 記 の 記 述 |
|-------|----|--------|----|------------|--|
| 1月1日 | 月 | 11月22日 | 癸卯 | 元日 | 「朝、八幡浜神社参拝」 |
| 18日 | 木 | 12月10日 | 庚申 | 庚申講 | 「今夜はお行神様で御馳走を食べた。」 |
| 30日 | 水 | 23日 | 癸酉 | 餅つき | |
| 2月1日 | 木 | 24日 | 甲戌 | 餅つき | |
| 4日 | 日 | 27日 | 丁丑 | 節分 | 「餅撒き」 |
| 8日 | 木 | 1月1日 | 辛巳 | 旧正月 | 「旧正月第1日だ。朝、雑煮を食べた。」 |
| 11日 | 日 | 4日 | 甲申 | 大洲祇園神社参拝 | 「今日は八多喜祇園神社の大祭日だ。川之内青年団員一同参拝す。」 |
| 19日 | 月 | 12日 | 壬辰 | 地藏様参り | 「お地藏様へお線香をたて願ほどきをする。」 |
| 22日 | 木 | 15日 | 乙未 | お十五日 | 「今日はお十五日」親類縁者を呼んで手料理で楽しい夜食 |
| 28日 | 水 | 21日 | 辛丑 | 山神様祭 | |
| 3月14日 | 木 | 2月6日 | 丙辰 | 墓掃除 | |
| 16日 | 土 | 8日 | 戊午 | 明石寺参り | (社日) 7:00大元神社集合、古藪を通り、11:00明石寺到着。 |
| 18日 | 月 | 10日 | 庚申 | 彼岸入り | |
| 24日 | 土 | 16日 | 丙寅 | 彼岸墓参り仏事 | |
| 4月3日 | 水 | 26日 | 丙子 | 川之内春祭り | 「神楽を見に行く。」 |
| 6日 | 土 | 29日 | 己卯 | | 「おはんにゃ様を取りに行く。」 |
| 7日 | 日 | 30日 | 庚辰 | お般若様 | 「上田へおはんにゃ様の御馳走をよばれに行く。」 |
| 10日 | 水 | 3月3日 | 癸未 | 節句 | 「氏神様境内挙行の川之内上組総おこもりに参加」 |
| 15日 | 月 | 8日 | 戊子 | 平地祭り | (大洲市平地の春祭り) |
| 19日 | 金 | 12日 | 壬辰 | 八幡浜春祭り | |
| 22日 | 月 | 15日 | 乙未 | 龍王神社参拝 | 「大島(八幡浜沖)龍王神社へお参り」 |
| 28日 | 日 | 21日 | 辛丑 | 四国山参拝 | 「11時氏神様集合、お大師様へ日参りに行く(青年団)2時山より下る。」 |
| 6月1日 | 土 | 4月26日 | 乙亥 | | 「大元神社へ参拝に行く。」 |
| 7月5日 | 金 | 6月1日 | 己酉 | 明石寺参り | 「明石寺弘法大師様へお参りに行く。」 |
| 7日 | 日 | 3日 | 辛亥 | 農休み | 「旧千丈村は農休み。八幡神社に参拝する。」 |
| 13日 | 土 | 9日 | 丁巳 | 夏祭り | 「お山踊り 5時半竹切り(10本)、6:30大元神社で全身水をかむる。たんざく、しで、しめをつくる。11:30集合、12:00開始、4:00終了。」 |
| 23日 | 火 | 19日 | 丙寅 | 和霊大祭 | 「川之内からも大勢宇和島へ行く。」 |
| 28日 | 日 | 24日 | 壬申 | 大祓 | 「八幡浜多賀神社の大祓祭に行く。」 |
| 8月10日 | 土 | 7月7日 | 乙酉 | 七夕 | 「七夕様」 |
| 12日 | 月 | 9日 | 丁亥 | 南茅観音様参り | |
| 16~18 | 金 | 13~15 | 辛卯 | 盆 | 「盆棚をつくる。」 |
| 24日 | 土 | 21日 | 己亥 | お大師参り | 「四国山にお大師参りに行く。」 |
| 9月1日 | 日 | 29日 | 丁未 | 大元神社参拝 | 全身水浴び |
| 7日 | 土 | 8月6日 | 癸丑 | 青年団 金山出石寺 | 「大元神社参拝後、一直線出石寺へ。かえりは瀬田で休憩す。」(瀬田は大洲市瀬田) |
| 10月1日 | 日 | 9月1日 | 丁未 | 大元神社参拝 | 全身水浴び |
| 9日 | 水 | 9日 | 乙酉 | 秋祭り | 「川之内地区秋祭り。」 |
| 17日 | 木 | 17日 | 癸巳 | 平地秋祭り | |
| 19日 | 土 | 19日 | 乙未 | 八幡浜秋祭り | |
| 11月1日 | 日 | 1日 | 丁未 | 大元神社参拝 | 「全身水浴び」 |
| 9日 | 土 | 10月10日 | 丙辰 | 出石寺、新谷琴平参り | (大洲市喜多山の琴平神社) |

社にて神楽を奉納して、四日に花見を行っている。かつては地区の経費で市内川名津神楽、高野地神楽、大洲市の野田神楽を招いていたが、戦後まもなくから、四二歳と六〇歳の厄年の男が厄払いのために寄進した金で奉納するようになった。現在では人口が減少してお金の供出ができず、神楽は行われていない。

ウ 民間信仰

オチャド オチャド(お茶堂か)と呼ばれる所には、首無しの馬がでるといわれる。ここには地藏菩薩舟型立像(享保年間)が祀られており、上ノ坊組で管理している。この地藏の由来は、僧侶がここで、毒まんじゅうを食べさせられて、殺されたためそれを供養するため祀りはじめたといわれている。そのため、今でも地藏にまんじゅうを供える時には一口食べて、毒味をするという。

平家の墓 下ノ組の西岡に平家の墓と伝えられる石造物がある。その隣に国道が開通するまで大師堂があったが、これは約三〇メートルほど移動させられた。ここに弘法大師像が安置されている。また、柏木の山の上にコイモリ(小さい森か)という場所がある。ここにはかつて城があったといわれ、また平家の落人の伝説もある。おがみや かつて昭和初期まで「おがみや」といわれる女性がいて、黄色い衣を肩に掛けて、大元神社で病人などの祈禱を行っていた。

(2) 川之内のお山踊り

川之内の石鎚信仰は、近世までさかのぼる。『愛媛縣社寺一覽表』によると、天明年間(一七八一〜八九)に地区内に悪病が流行したとき、村内の申し合わせで石鎚山より権現様を勧請し、川之内村碁盤ヶ峠に鎮座させたといわれている。現在は古藪の白王神社の境内社として石鎚神社があり、また千賀居森神社にも石鎚が祀られているといわれる。

お山踊りは、旧暦六月九日に地区の氏神である大元神社において行われていたが、現在ではこの日に一番近い日曜日に行っている(平成七年は七月九日)。このお山踊りは、「石鎚権現踊り」や「シデ踊り」とも呼ばれている。この踊りは石鎚信仰に基づく芸能であることは認識されているが、現在川之内には、石鎚の先達は存在せず、地区の代参者も出ていない。お山踊りを演ずる前に読経と祝詞が奏上されるが、これは地区の大師堂を管理し、地区内の盆の棚経を読む者が行っている。

お山踊りを行う場所は、戦前は大元神社境内だったが、戦後になって大元神社脇の敷地に移った。踊り場には、四方を笹のついた孟宗竹を立て、白色の御幣をつけた注連を張って境界をつくる。その結界の中には女性が入ってはいけないとされ、踊り手は青年男子に限られている。踊り手の青年男子は、お山踊りを踊ることによって成人の仲間入りをする。また、かつては、お山踊りの踊り手になるのを機に、はじめて親に浴衣をつくってもらっていた。

お山踊りには派手さはなく、単調そのものである。踊りの稽古は行わず、本番を迎える。踊り手は、太鼓に合わせて浴衣に下駄履き、両手に幣を振って踊る。幣は、約三〇センチに切った女竹の先に五色の御幣をつけたものである。それを、当日の朝に製作し、大元神社に供え、神事を行う。終了後、一人につき片手で二本ずつ、計四本もって踊る。

当日の次第は、まず早朝に地区長と各組長が山へ竹を切りに行き、幣を製作し、注連を張るなどして会場の準備を行う。昭和一五年の「N家日記」によれば、五時半竹切り(一〇本)、六時半大元神社で全身水をかむる。たんぎく、しで、しめをつくる。一一時半集合、一二時開始、四時終了(七月一三日条)。とあり、かつては水垢離が行われていたことがわかるが、現在は行われていない。午後一



写真⑪ 神社の注連に飾られたシデ

了すると、注連縄が切られ、世話役より切られた注連縄を結んだ幣が各家に配られる。これを玄関、納屋、マツリガミ、村境などに供え、悪病除けとする。

お山踊りに関しての由来ははっきりしない。地区には、慶応二(一八六六)年の石鎚の御詠歌の写本が伝えられている。この御詠歌を台本として歌いながら踊る。お山踊りの歌詞は、七七調を基本として、石鎚山の参拝によるご利益、とくに悪事災難除けのご利益があると歌われている。これまで報告されている大洲市高山地区や八幡浜市向灘など他地区のお山踊りの歌詞と類似しているが、台本が慶応年間の写真であり、他地区の台本より時代的に古いことからここで紹介しておく。

時から読経し祝詞をあ

げ、踊り手は幣をもつ

て踊りにはいる。御詠

歌調に念仏を唱え、時

計回りに静かにまわり、

途中何度か足を踏みな

らす。その時「ナンマ

イダ」と唱える。踊り

は、御詠歌を三度歌い

踊るのを一回とし、そ

れを三回こなす。計九

度踊る。四時から五時

には終わる。踊りが終

諸悪ヲ除 慶應二歳

(キリーク)奉詠四国三拾三番御詠歌

御祈禱 寅六月吉日 若連中

川之内村

石鉄大権現様御詠歌也

家内安全悪ヲ除ク御祈禱御守也

(原文)

うれしめでたのごんげんをどり

くにもさかえてあくじをよける

にしもひがしもみなみもきたも

おやまをどりはそのみのごきと

をやまたいこのきこえるまでは

あくまはろうてあくじをよける

こころしようじきみをしようじきに

おやままいりをするひとびとは

あたるさいなんよけさせたもを

しそんはんじよとまもらせたもを

すでにをやまのごえかをごろじ

くだくいしづちよろづのつみを

しんじまことではこびをなせば

どきにごりしよがあらわれたもを

しんにまことのなきひとびとは

うわきごころでまいらんがよし

をやにこうこう大いちにして

くにのおきてをそむかぬように

嬉し愛でたの権現踊り

国も栄えて悪事を除ける

西も東も南も北も

お山踊りはその身の御祈禱

お山太鼓の聞こえるまでは

悪魔祓うて悪事を除ける

心正直、身を正直に

お山参りをする人々は

当たる災難除けさせ給う

子孫繁盛と守らせ給う

既にお山の御詠歌を御朗じ

砕く石鎚よろづの罪を

神事まことで運びをなせば

直に御利生が現れ給う

真に誠のなきひとびとは

浮気心で参らんがよし

親孝行第一にして

国の掟を背かぬように

しようほうばいともむつまじうしましう
がまんじやまんのころをなをせ
なをしやごりしうでよいたまになる
たまをなをさにやとばちがあたる
まえのあくじをさんげのもんで
がしやくしようぞうでみのさんげして
つねにみもちをしうじようじようにして
さふきながれにをはらいなさる
おやままいりでころのたまを
みがきやひかりのでてくるものに
なぜにあくじのよごれたたまを
あとにのこしてまたなににする
まえはかみさまうしろはほとけ
まいるころでつねづねみよれ
はんやしんぎようやくわんのんぎうや
のまくさまたでこりしよがござる

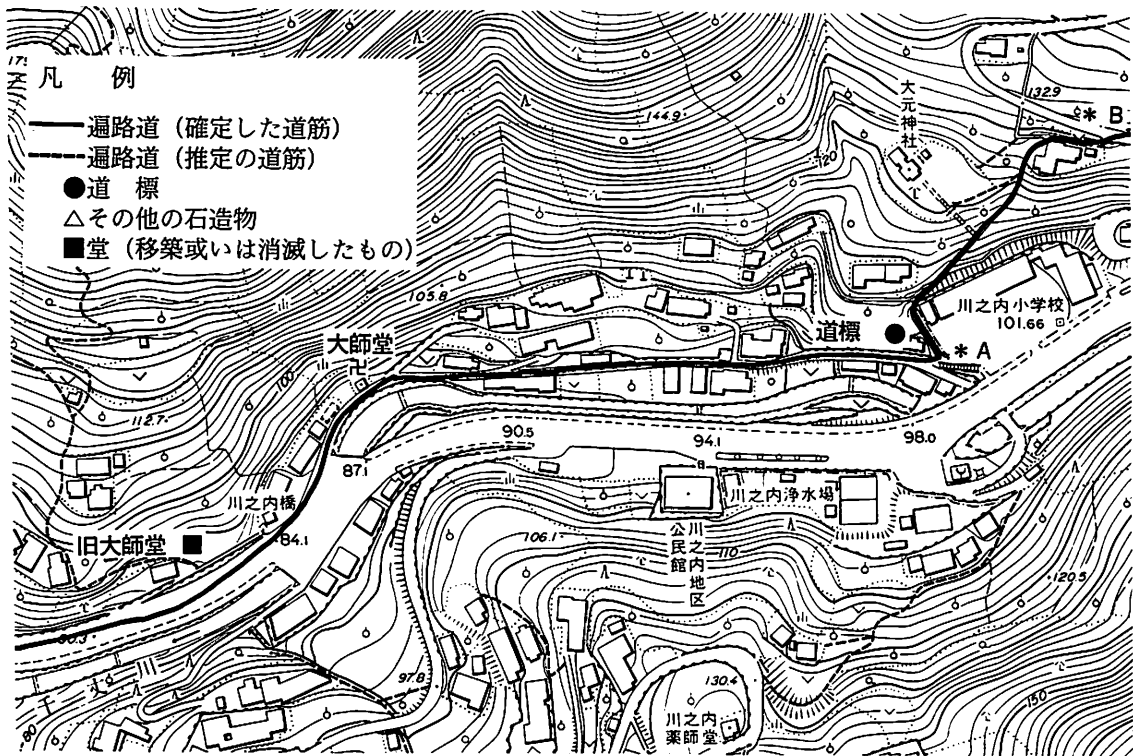
昔胞輩睦まじうしましう
我慢邪慢の心を直せ
直しや御利生で良い霊になる
霊を直さにやどばちがあたる
前の悪事をさんげのもんで
呵責清浄で身の懺悔して
常に身持ちを清浄にして
清き流れに祓いをなさる
お山参りで心の霊を
磨きや光の出てくるものに
何故に悪事の汚れた霊を
後に残してまた何にする
前は神様後ろは仏
参る心で常々見よれ
般若心経や観音経や
ノマクサマダで御利生がござる

(大本 敬久)

註

(一) 森 正史「山と信仰 石鐘山」佼成出版社 一九九五

三、川之内の遍路道



(1) 川之内の遍路道
 ここでは、川之内に残る道標とかつての遍路習俗について紹介するとともに、地区の遍路道を辿ってみたい。

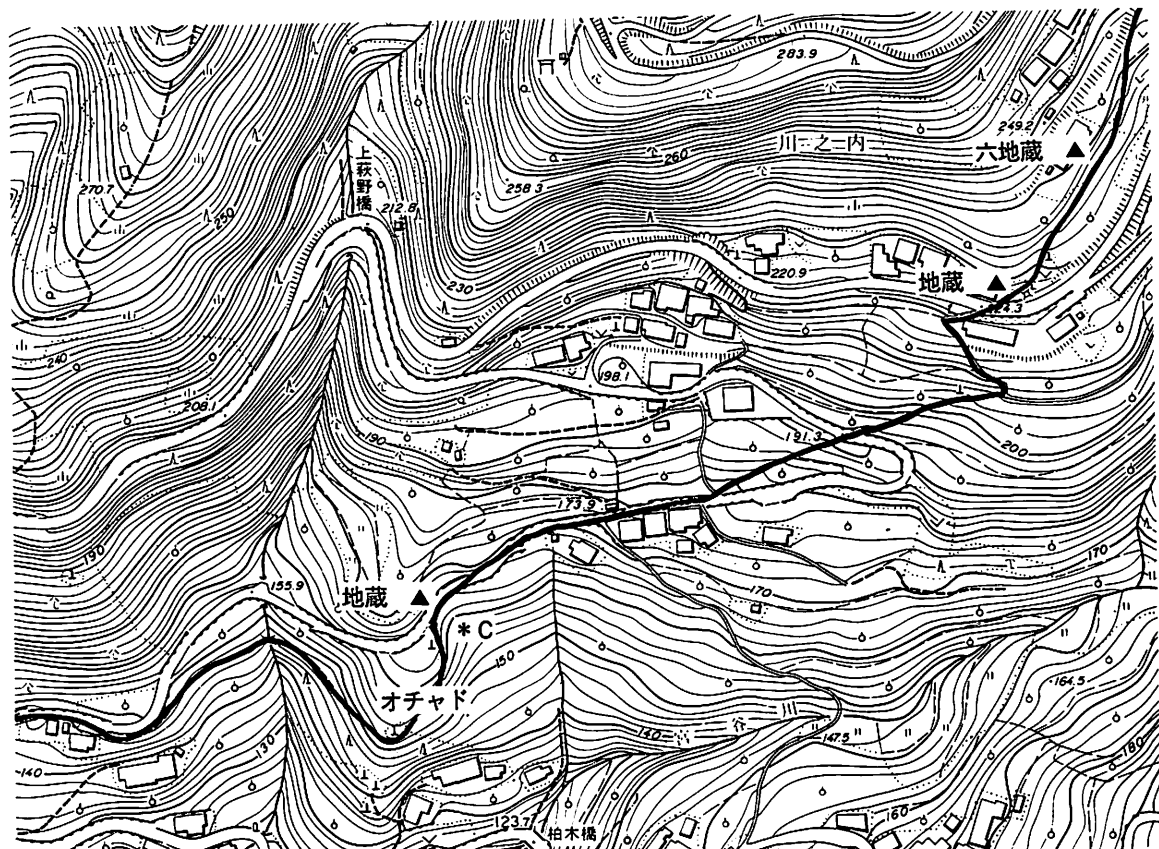
八幡浜の町を出て松柏、郷を過ぎると、川之内下ノ組に入る。かつては川之内に入るとすぐ左手に大師堂があり、ここは遍路の食事や休息の場でもあった。大師堂は、昭和四六(一九七二)年の国道一九七号線の建設に伴って東側に約三〇メートル移築されている【写真⑫、⑬】。

かつての大師堂の位置から約三〇メートル行くと、四国遍路の道標がある△表4▽【写真⑭】。現在は川之内小学校横の石垣の上に建てられており、高さは四八センチメートルでやや小振りな道標である。正面の指印の下には弘法大師坐像が刻まれており、銘文は左記の△表4▽の通りである。建立の時期は、右側面銘「□政四巳七月」により文政四(一八二二)年あるいは安政四(一八五七)年のいずれかと推定され、江戸後期の建立であることがわかる。また、この道標のある石垣の横には大正一〇(一九二二)年の道標が建てられており、その正面には「左 おおず道 右 ふるやぶ道」と刻まれている。いずれの銘文の内容も、現在の道路状況と一致している。

△表4▽川之内の四国遍路道標

| 向き | 銘文 | 法量(縦×横×高さ:cm) |
|----|-----------------|-----------------------------------|
| 右側 | □政四巳七月 | 道標 一八〇×一九八×五〇・五 台石 三〇〇×二九五×一九〇 |
| 正面 | ▽(弘法大師坐像) 左へんろ道 | |
| 左側 | | |

道標の「左へんろ道」の指示に従い小学校横の石段を上がり



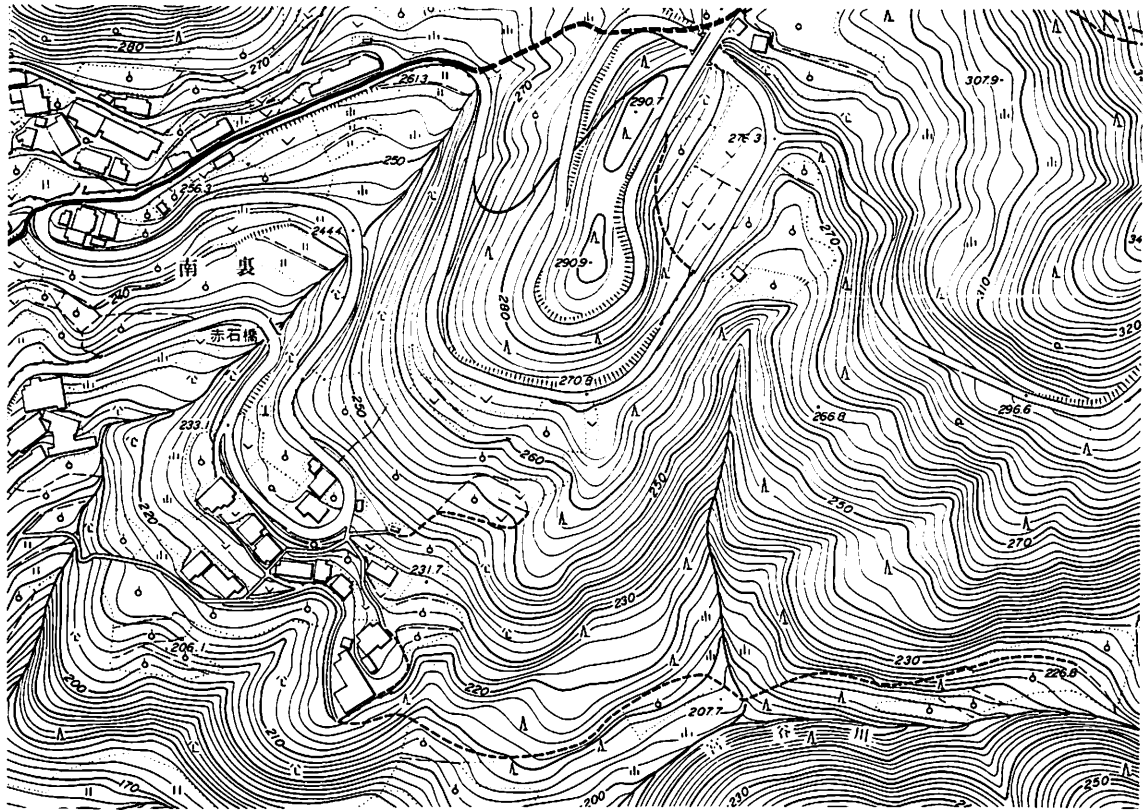
*A、大元神社の鳥居の前を通過して小道を進む。約一〇〇メートル行くと道は東西に分かれているが、東側の狭い道を通って現在の県道八幡浜大洲線に出る。

県道を横切るようにして、前方左手の小道に入る*B。大人がやると一人通れる程の狭い道で、このあたりでは、かつて棚田や段々畑の耕作が行われていたため、道の山際には石垣が続いている。この小道を進んでいくと、棚田の水源だったスボガワ（主頭川）があつて橋が架けられている。橋を渡り尾根沿いにいくと、地区の人々が「オチャド」（お茶堂か）と呼んでいる場所がある【写真⑮】。かつてはここにお堂があつたといい、今でも地藏菩薩立像が残っている。オチャドのところを曲がって更に進むと、再び県道に出る。

県道は道幅も広く、先程の小道より標高差が少なく石垣も見られないせいか、小道と比べて非常に視界が開けている。一二〇メートル程行くと、前方左手に県道の開通以前に使われていた旧道が見えてくる*C。

この旧道をしばらく進んでいく。徒歩の場合は、この旧道を進む方が県道よりも遙かに近道になる。道沿いに二体の地藏菩薩坐像があり、ここから川之内上ノ組に入ると、その先に六地藏がある。再度県道に出て二五〇メートル程行くと、山際に小道がある*D。この小道は県道よりも近道になるため、小道の方を通つたのではないかと思われる。小道を進んで県道に出ると、夜昼峠を越えて大洲市平野に出る。川之内の大師堂から峠の頂上までの所要時間は、成人の足で約三〇〜四〇分間である。

平野を経て大洲の市街地を過ぎると、徳の森に番外札所の十夜ヶ橋がある。夜昼峠を越えた通路は十夜ヶ橋から打ち始めて、四国遍



路を続けていったのだろう。

川之内の遍路道沿いには木製の道標も何基か立てられていたというが、現在は消滅している。昭和一四(一九三九)年、八幡浜市郷と大洲市野田の間に国鉄予讃本線夜昼隧道の開通(一)を境に遍路は川之内を通らなくなり、接待や善根宿の習俗もみられなくなったという。川之内の遍路道も、交通網の発達に伴って消えていった遍路道の一つといえるだろう。

(2) 川之内の遍路習俗

川之内を通る遍路の数が一番多かったのは、やはり春である。

「菜種の花が咲く頃になったと思ったら、お遍路さんがいっぱい通るようになってねえ」

というような述懐は、四国の多くの地で聞き取りできるだろうが、川之内でもそれは同様である。川之内の人々も四国遍路を行っており、明治、大正期の納経帳が現存している。また、「N家日記」から作成した社寺参詣の一覧(表3)を見ると、宇和町明石の明石寺やお四国山(二)といった四国遍路に関係の深い参詣が地域の行事として行われていたことがわかる。お四国山には、川之内から毎年参詣しており、戦前の縁日は夜店も出て賑わったという。

遍路への接待は、組や接待講といった集団による接待は行わず、家の玄関前で経を読む遍路に米を接待した。一軒当たり、手に一握みの米を接待することが多かったが、遍路からの納め札の返礼はなく(三)、一礼をして去っていく遍路がほとんどであった。大々的な接待はみられなかったが、善根宿は多くの家で行われていた。大洲街道に沿って建てられている家が多く、遍路の方から宿を頼む場合がほとんどだったという。ただ、個人でも遍路講のような組織でも、定期的に訪れる遍路はなく、特定の個人あるいは講の定宿もなかつ

た。また、川之内の大師堂で寝泊まりする遍路もおり、彼らは堂の前で煮炊きをしたり、川で洗濯をしていた。しかし、このように川之内を通る遍路はこれから峠を越えて参拝を始める者ばかりで、峠を下る遍路は見なかったという。

(3) まとめ

今回の調査では、道標の所在⁽¹⁾や遍路道を確認し、遍路の習俗に
関する情報を得ることができた。川之内から夜昼峠を越える道は、
八幡浜を起点として大洲を経て松山まで続いている。よって、川之
内を通る遍路は八幡浜を起点とした者であることが想定される。こ
のような遍路としては、地元八幡浜の遍路、そして八幡浜航路⁽²⁾を
利用して九州から渡ってきた遍路などが挙げられよう⁽³⁾。

従来の四国遍路の研究では、川之内のような地域、すなわち札所
や番外札所がない地域や、札所を結ぶ遍路道がない地域は顧みられ
ることがなかった。しかし、今後はこのような地域も研究対象とし
て視野に入れる必要があるだろう。

(谷脇 温子)

註

(1) 『八幡浜市誌(市政五〇周年記念版)』一九九三 七三六ページ

(2) お四国山とは、嘉永二(一八四九)年三月吉岡屋大八が八代、広瀬に
またがる山に設立した地四国で、八十八ヶ所の本尊の石仏が全山に祀ら
れている。中央山頂には大正二(一九一三)年に建立された健徳寺があ
る。

(3) 接待を受けた遍路は、納め札を一枚接待者に手渡す。この納め札は厄
除けなどに用いられる。(白木利幸『巡礼・参拝用語辞典』 朱鷺書房
一九九四 七六ページ)

(4) 八幡浜市内では川之内の遍路道標以外にも、かつて浜田橋付近に指型
が浮刻され「遍ろみち」、「すかうさんへ十六里」という銘のある嘉永
七(一八五四)年七月建立の道標があった(松田守「道標を尋ねて」『八
幡浜史談』七 一九七九)。

(5) 明治大正期の八幡浜出入りの航路は、大阪―四国線、日出―宇和島
線、八幡浜―宇和島線、三瓶―名取線、小筑紫―佐伯線で、大阪、九州、
四国などと船で結ばれていた。(註1と同じ、七三二ページ)

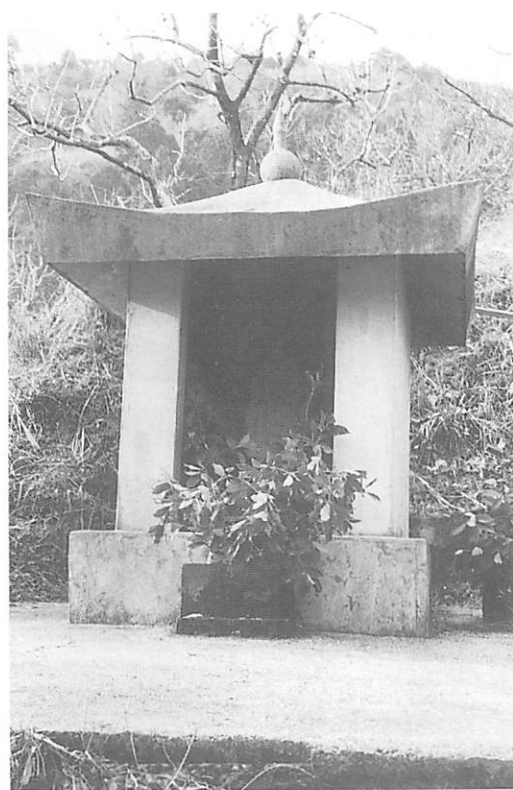
(6) 九州における四国遍路関係の事例としては、四国遍路の道中記(『四
国遍路覚』『国見町史』一九九三 所収)や、多くの地四国、霊場の土
砂を持ち帰って立てた土砂塚、宇和島に渡り接待を行っていた講などが
ある(染谷多喜男『日本の民俗 大分』第一法規 一九七八 一四〇ペー
ジ)。大正七(一九一八)年に四国遍路を行った高群逸枝は、八幡浜に
上陸している。(高群逸枝『お遍路』中央公論社 一九八七)。また、明
治初期の八幡浜浦の家並みの記録には二軒の遍路宿があったことが記さ
れている(福井太郎・菊池正五「明治初期の八幡浜浦」『八幡浜史談』
八 一九八〇)。これらの遍路宿は港の近くにあるから、船を利用する
遍路を対象とした宿であったことが推定できる。九州から八幡浜に来て
いる遍路は数多く、決して散発的なものではなかったといえるのではな
いだろうか。



写真⑬ 弘法大師像



写真⑭ 大師堂



写真⑮ オチャド



写真⑯ 四国遍路の道標